

---

# テン

Y.Y

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テン

### 【Nコード】

N8956L

### 【作者名】

Y・Y

### 【あらすじ】

国語の教師を務める陣内 奥次。西額中学校に勤め、生徒は優しい子ばかり。しかし、陣内を昔から恨み今も恨み続ける少年がいたのだ！陣内はどうなるのだろうか？

## 1ページ（前書き）

この小説を読んでくれてありがとうございます。

## 1ページ

### プロローグ

今頃外では、台風が起こっているだろう。昨晚のニュースで伝えられていたからだ。風は止まず、終始吹き荒れている。そして、窓から見える景色を覗いた後、尾林<sup>おはやし</sup> 崇人<sup>たかひと</sup>は終始、手に持っている写真を見つめ、こう呟いた。「……………テン」

### 陣内 奥次

6月5日。渡加敷市城井町、西額<sup>にしめか</sup>中学校。

こんな暑い日だとは思わなかったと、陣内<sup>じんない</sup> 奥次<sup>おくつぎ</sup>は、「クソ……」と漏らしたのだ。今日は特に暑い。昼時は25度を越えるらしい。まだ3時限目だと心の中で、毒づいた。

陣内は現在、1年3組の担任と国語の教師を務めている。今日は、1年2組の授業を終わり、2年3組、3年1組と2組の授業を行う予定だ。今、2年3組の授業をしている。

「…………これは口語自由詩だな。じゃあ、近藤。このページを読んでみる。」2列目の真ん中の席に座っている近藤<sup>こんどう</sup> 晃彦<sup>あきひこ</sup>は露骨にいやな顔をした。「ほら、近藤、いやな顔するな。」近藤はすかさず、「えゝまじゝ」と声を出した。「言いたくないのか?」「分かりました……」と、近藤はその詩を朗読し始めた。陣内の授業は、先生に反発すると、10分間立たされるという規律があるのだ。そのおかげで、先生の支持率は迷走している。まあこれが教育だ。と陣内はいつも思っている。しかし、最近は終了10分前に反発し、立ち、時間を減らしているのだ。やれやれと思った。

西額中学校は、現在390人生徒がいる。先生は18人いる。そのうちの一人、陣内は西額中の近く、箕島というところに住んでいる。そして、生徒の一人、近藤は、陣内と家が近く、仲がよいらしい。今、陣内は35歳だ。

何故陣内は、先生になろうと思ったのか。

昔から、陣内は先生になろうと思っていた。陣内は小学生だった頃、父親が交通事故で亡くなり、母は病気で亡くなった。奥次は独りぼっちになって、親戚の家に引き取られた。親戚は優しく、本当に大好きだった。しかし、奥次は騙された。いや、裏切られた。それはある日の晩。その日は、雨が強く吹いている日だった。ある日親戚の主、川越<sup>かわこし</sup>峰嗣<sup>みねつぐ</sup>が、奥次が寝ているものだと思って主の妻、文子とこんなことを話していた。「やっぱり・・・奥次は家の邪魔者だな・・・」「ええ・・・経済状況が苦しいですもんね・・・」「やっぱり・・・孤児院においていくか・・・」「そうね・・・」その会話を聞いた奥次はこう思った。邪魔者邪魔者邪魔者と。頭の中でそれだけが駆け巡り、その夜、家内が寝静まった後、親戚の家を出て、最寄の藤迫駅に乗り、箕島駅に着き、泣きながら、今にも看板が立てかけられているかもしれない家に戻ったのだ。

そして次の日、小学校の担任、神楽坂<sup>かぐらざか</sup>祐助<sup>ゆうすけ</sup>先生にこう訊かれたのだ。「陣内、困っていることがあるのか?」と。そして、陣内は一拍考えた後、すべてを話した。そしたら神楽坂が「それじゃあ、今日はうちに泊まれ。困っているんだろう?」と優しい声をかけてくれた。そして陣内は、深く頷いたのであった。神楽坂の家は、箕島の隣、沖山に住んでいるそうだ。家もさほど遠くはない。神楽坂はアパートですんでいて、アパートは袋座荘という最初見たときは、ボロイアパートだな。が脳を占めていた。外装は、壁が剥がれていて、ペンキは消えかかっている、階段は、もう錆だらけであった。しかし、中は先生の趣味である物がいっぱい置いてあった。さすがに驚きを隠せなかった奥次は、「うわー」と声を出してしまった。そしたら、神楽坂が照れながら、「どうだ?広いだろう。」とやさしく声をかけてくれたのであった。神楽坂は独身で、実家は、宇治市にあるといっていた。神楽坂は、「よし、腹も減ったし、晩飯を作るか。手伝ってくれるか?陣内?」と。

陣内は頷いて、晩御飯の手伝いをした。神楽坂の冷蔵庫には、玉葱、

人参、牛肉、ジャガイモ等が入っていた。陣内は、玉葱や人参の皮を剥いた。神楽坂は牛肉やジャガイモを加えて、肉じゃがを作った。ジャガイモや人参の大きさが区々（まちまち）だが、それはそれで美味しかった。それから、陣内は神楽坂の家に行き、いつも晩御飯と一緒に食べていた。月曜日は焼き魚、火曜日は肉じゃが、水曜日はカレーなどいろいろな料理を食べた。特に寒い日は鍋や、すき焼きを食べた。陣内はこのまま、大人になれば楽しいだろうと考えていた……が。

その楽しい日は長く続かなかった……。3月8日、陣内が小学校を卒業する間際、職員室にて。「はい、東千鶴ひがしちかく小学校です……。え？神楽坂先生が？」と言うのは、教頭の高橋たかはし博一ひろかず先生だ。「分かりました。」と言い、先生たちを呼び緊急会議をした。「ただいま、神楽坂先生が、交通事故を起こした模様です。現在、先生は意識がありません。病院から連絡があるまで待機！」と言い残し、席を離れた。

外飯国立病院とおい。「大丈夫ですか？」救急隊員が神楽坂を揺さぶっている。意識はない。酸素マスクが曇っているのがよく分かる。「先生。手術室は？」「手配が取れた。至急手術をするぞ。」「はい」そう言つて、手術室に担架で運ばれた、神楽坂が入っていた……。6年2組。ざわざわしていた教室がある一言で、水を打ったように静まり返った。「えゝ実は、神楽坂先生は、榎町交差点で交通事故を起こし、今病院で、治療を行っています。先生は気が気でなくて心配です。皆さんで、神楽坂先生の回復を祈りましょう。」「そう言つて、原知先生は出て行った。しばらくの間、誰もしゃべる人はいなかった……。

下校。陣内は気になって、6年2組の担任、原知はらち由香子先生ゆかこに話を聞いた。「先生。神楽坂先生は、どこの病院にいるんですか？」「……小泉町の外飯国立病院よ。箕島駅から乗つて、生津揣摩駅、立花南駅、立花駅、そして、小泉町駅を降りてすぐよ。」「わかりました。」「車には気をつけるのよ。」「はい」そう言つて、陣内

は、箕島駅に乗り、小泉町に着くと、すぐに走って、外飯国立病院に向かった。

外飯国立病院。陣内は、（初めての病院だったので）少し戸惑って緊張もしたりした。「すみません・・・神楽坂 祐助先生は？」看護婦はこう答えた。「神楽坂 祐助・・・ああ。今オペ室にいます。たった今、治療を受けているところですよ」すこし元気がない、か細い声で応対した。早速、案内掲示板を見てオペ室の確認をした。

「2階の、3番目の部屋にいるって聞いたからな・・・」見つけた。そして近くにあったエレベーターの ボタンを押した。が、じれったかったので階段で行くことにした。

2階オペ室。オペ室の前にソファがあつたので、そこに座った。未だ、あの中に先生がいる・・・あの優しかった先生が・・・どうして・・・。

1時間経過して、「ガチャ」オペ室のドアが開いた。医者は深刻な顔をしている。陣内は意を決して聞くことにした。「先生は大丈夫？」すると医者は陣内の目の高さまで背を屈めこういった。「大丈夫。きつと良くなる・・・」その言葉を信じ、毎日お見舞いに行つた。しかし面会謝絶。諦めなかったが、とうとう、中学生になつていた。

1カ月後。医者の言つた通り、神楽坂先生は回復したが、失声症という小学生、いや中学生の陣内にはさっぱり分からない病名だった。心的外傷や心因性で声が出なくなつてしまつたらしい。

後から聞いた話したが、神楽坂は、榎町交差点の信号機「榎町南」で少女が急に飛び出してきた。神楽坂はそれを避けようと、ハンドルを切つたのだが、反対車線の車に激突。神楽坂はこれといって良くない怪我を負つた。そして、その光景をみて神楽坂は失声症になつたのであつた。

陣内はこれほどまでにない衝撃を受け、授業も上の空だった。もちろん朝飯や晩飯はコンビニにだ。たまに飯を食わないときもある。しかし毎日欠かさず行っていることがある。それは、「面会」だ。

毎日、箕島駅に乗って、外飯国立病院に行っているのだ。神楽坂は104号室。「あつた・・・神楽坂 祐助。間違いないな・・・」売店で買ってきた、いろいろな花を手にとって。「コンコン」「・・・どうぞ」声が返ってきたので入った。神楽坂は窓の外をボーッと眺めていた。「先生・・・花もって来ました。」「ありがとうございます・・・」最近先生は声が出せるようになった。後遺症は残っているらしいが。それから先生と他愛のない会話をした。「・・・陣内は立派になったな。中学校に入学してもがんばれよ」「はい・・・それより先生、来週退院でしたね?」「あ・・・そうだったな・・・」「先生の退院祝いを来週行いませんか?」「ああ・・・」それからまた会話が続いた・・・。

陣内の家は、神楽坂先生が使っていたアパートの一室だ。

その夜。電話が掛かってきた。「はい陣内ですけど・・・え!?先生が!?分かりました今すぐ行きます!」早速、箕島駅から小泉町駅に来た。

外飯国立病院。「どうして、こんなことになったんですか?」医者「多分後遺症が残っていたんだと思います」「先生は助かるんですか?」「分かりません・・・」「分かりませんって・・・あなたそれでも医者ですか!」「怒声を放った。「賭けてみる価値はあります。」「しばらくの沈黙・・・」「・・・分かりました」

オペ室の前で待つこと2時間。ドアが開いた。「どうですか?」医者は頭を振り、「残念ですが・・・」と言った。茫然自失の陣内。間もなく、神楽坂の遺体が運ばれた。「先生・・・なんで再会がこんなんだよ!?先生約束したじゃないか!来週、退院祝いしようって!それなのになんでだよ!なんで死んじゃうんだよ・・・」陣内は涙声でこう訴えた。そして神楽坂は白い布を顔に被され、霊安室に運ばれた。

家に帰った陣内は、部屋の壁を見つめていた。「先生・・・もう会えないんだな・・・」

いつしか、陣内は自殺を図ろうとした。いすの上に立ち、電灯から



くくられた、ロープを首につけ、いすを蹴飛ばした・・・カッターで手首をジグザグに切り、風呂場で・・・しかし、今の陣内にはそんな気力は湧いてこない。

その時から陣内は先生になろうとしていた。神楽坂が亡くなった今、俺は先生のあとを継ぐ事にした。という事だろう。ふと、気になった事があった。あれ？チャイムが聞こえる。幻聴か？いや、未だ聞こえてくる・・・。

「・・・せ・・・い・・・せん・・・せ・・・先生！」「ど、どうした？」「どうしたじゃないですよ。ボーっとして何考えてたんですか？」「い・・・いや別に？」「顔は正直だ。」「うそだ。」「ま・・・まあ今日の授業は終わり！」「教室を出て、小走りで職員室に向かった。」「オツと間違えた。」「職員室と図書室を間違えてしまったらしい。」

陣内の母校は箕島北中学。その時の場所が似ていたので間違えた。職員室のドアが開き、冷房が掛かっている机に向かった。「ひゃく涼し」隣の机からこんな声が聞こえた。「ほんとだね」ふと、見てみると、隣に座っているのは、保健体育の中田なかた 康太先生だった。あれ・・・何か違う・・・「先生！席違うでしょ！？」「え？あ！ほんとだ！」「アハハと言いながら、席を立った。中田が座った席は理科の黒町くろまち 悠淳先生ゆうじゅんの席だ。黒町は授業なのだろう。まだきていない。

休み時間の間、陣内は次の授業の準備をしていた。「えーと、ワークブック、漢字ノート、教科書つと・・・」チャイムが鳴ったので次の3年2組の授業を行い3年1組の授業。ちらほらと生徒が数人いたので、小走りで3年2組の教室のドアを開けた。

その時、「ドサッ」頭の上に何かが落ちてきた。なんだこれは？「ヤーイ！！」引っ掛かった！引っ掛かった！「なんと落ちてきたのは「黒板消し」だ。多分生徒が仕掛けたんだろう。沸々怒りがこみ上げてきたので、キレてしまった。「お前ら！ふざけんな！俺がお前らに教育してやってんだろが！それでも中学生か！もう俺帰る

！」「バン！！！」とすごい勢いでドアを閉めた。俺は間違っていない。間違っていない。それしか考えられない。もう俺の脳は葛藤していた。ほんとにこれでいいのかと言う心理。やっぱり戻ろうという概念。しかし信念は曲げない。

「あれ？先生、授業じゃなかったんですか？」と、言うのは事務員の工藤 鶴子先生だ。「ちよつと・・・ね」と誤魔化し、すぐに職員室を出た。やっぱり戻ろう・・・と思ったからだ。

### 3年2組。

「これでいいんだろう？尾林。」尾林は、「ああ・・・」と答えた。「でも、何で、陣内を怒らせたんだ？」一人の生徒が訝しげに聞いてくる。「それは・・・」と尾林が言った後に、ガラガラとドアが開いた。陣内だ。尾林は「チッ」と舌打ちをした。「さつきはすまん。つい、こんな悪戯に怒ってしまった。許してくれ。でも、お前らだって悪いんだからな。じゃあ授業を行いたいと・・・思います・・・」陣内は、すぐ様気付いた。3年2組から異様な視線を浴びているのを・・・。陣内は気のせいだと心の中でいい、授業を始めた。「えー、今日は、『徒然草』の朗読発表だな。」授業を続けたが、陣内は、知る由もなかった。陣内が3年2組の『ターゲット』になっ  
っているなんて・・・

## 1ページ（後書き）

2ページ目も期待してください！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8956/>

---

テン

2010年10月14日14時20分発行